

提携先	(株)プレスオールターナティブ	記入日	2008/5/23
登録消費材名	烏龍茶、烏龍茶ティーバッグ		

．これまでに努力してきたことや、生産条件の限界性など

1) 職人の限界

林農園では、烏龍茶の栽培から製茶まで一貫して行っている。農園主の林文経氏は、台湾で数々の賞を受賞してきた茶作りの名人で、おいしい品質のよいお茶を作りお客様に満足してもらうこと、「いのちが大事」が口癖で、農薬や化学肥料に頼らない栽培方法で、次の世代にも健全な土地を残していきたいという想いを強く持ち、お茶作りに日々努力してきた。一方、既に74歳と高齢であり、ある部分では今までのやり方を変えようとしないう頑固な職人氣質のところがある。「作り手」としては一流であっても、「管理者」という点では、お茶作りを多分に感性、感覚に頼るところがあり、日々の細かい記録を重視せずつけないなど、いくら要請しても現在こちらが求めている管理水準となかなか噛み合わない点があった。そのため、こちら側から最低限と思われる内容を聴取したり、日本での検査を強化したり、実地見分などで追跡して補っていたが、生産者の自主的な記録に勝るものはない。

2) 工場の立地の限界

住居の1階が作業場であり、仕事場と生活エリアで一部の施設を共有していることから、作業場の仕切りという点において建物の構造上限界があった。

．前年に努力したことへの評価(成果や課題)

1) 息子の和春氏が管理担当者へ

数年前より、林文経氏の末息子・和春氏が徐々に仕事を引き継ぐようになっている。林文経氏の職人技を一朝一夕には学べないが、彼は父の茶栽培、茶作りを手伝いながら、PCを導入した記録の整備という管理面で力を発揮しつつある。数年内の有機認証取得も視野に入れているため、日々の細かい栽培記録、在庫管理記録が整うようになった。

2) 外部機械の使用を禁止

昨年、林農園から輸入した茶葉から残留農薬としてプロモプロピレートが検出されるという事故があった(その茶葉は輸入不許可となり流通していない)。原因を調査した結果、栽培過程で農薬を使用することはないが、製茶工程の内、ティーバッグ用にホール茶葉を粉碎機にかけて裁断する工程で、外部の機械を利用したため、この機械から農薬が移染したことが判明した。この結果を受けて、林農園では外部の機械を使用することを一切やめて、自家用の機械を購入し、すべての工程を自家工場で行うこととした。これにより、製茶の工程管理が行き届くようになった。また、この件については、弊社は普段より林農園とコミュニケーションを取り、製茶工程を熟知していたので、原因の特定を速やかにし、早期解決することができた。

．上記の成果や課題につながる今年度の努力目標、または今年度の新たな努力目標

1) 新工場

自宅前に新しい工場を建設する計画が進んでいる。現在、新工場の有機認証取得に向け、専門家のアドバイスを受けながら、設計をしている段階。完成はまだ先の見込みだが、新工場の稼働以降は、清潔区・汚染区等の仕切りが明確にでき、より管理水準の高い製造が行われる見込みである。

2) 管理水準のさらなる向上

林文経氏が製造者、息子の和春氏が管理者としての体制を整えることにより、特に記録の整備について、よりこちらが求める水準に応えるよう、話し合っていきたい。